

植物と民俗

平 島 裕 正

その1. ハクショウ(白松)と

お葉つきイチョウ(公孫樹)

マツは海岸のクロマツ、内陸のアカマツをはじめ、わが国内に10数種みられるが、常緑で色をかえない、古くから神のよりたもう聖なる木といわれ、生長のはやいたケ、病気を防ぐウメと並べられるように(「松竹梅」)縁起のいい、民俗的には、わが国きつての重要な木である。新年には年神がよる木として門松に用いられ「百樹の王」と呼ばれている。門松は正月の飾りではなく、正月を迎えるために(年神が依るために)必要なものであった。

イチョウの方も、弘法大師の杖立て伝説があるように、神の依り代としての杖に使われたり、火に強く、焼けても枯れないから、神社や寺院の境内に巨木となって残っている例は多い。

このマツとイチョウのなかでも、ハクショウ、お葉つきイチョウは珍しいものである。

ハクショウは中国の山西省、行山山脈に多産し、樹脂は少ない。わたくしは京都府立植物園で見たが、樹幹は薄い草色に、灰色か鼠色をまぜたような色で、つるつるとして、通常のマツのように厚い鱗(うろこ)状の樹皮はなく、ところどころ斑点状にむけたようになっており、シラカバに似た感じであった。これがハクショウの名のように白くなるのは、後生節節が多孔質で空気を多く含むためである。日本では、木栓形成層の発育が悪いので、白っぽくはなっても、いわゆる、真白にはならないのであろう。しかし、幹はともかく葉は明瞭にマツであることを示しており、ただ、日本のマツは二針葉、または五針葉だが、ハクショウの葉は三針、種子は大きくて食用になり、ことにカササギ(鶉)が、これを好物にしている。白松の枝に鶉がとまっている絵はよく描かれ、中国では、おめでたいものとされている。なお、ハクショウは、地元神戸の森林植物園にもあるというが、日本にあるのは数少ない。

お葉つきイチョウは葉のなかに変形して種のできるもののある珍しい樹で、わたくしのは見たのは多紀郡丹南町、弘誓寺(宇土観音)境内にあった樹齢400~500年のものである。この銀杏(ぎんなん)は、とにかく美味であった。

その2. ヤナギ(柳)とチャ(茶)

毎日、手近かに使われている燐寸(まっち)の軸木はハコヤナギ、ひと頃までもてはやされていた弁当の折りや、行李(こうり)はコリヤナギを原材料にしてつくられる。燐寸は神戸、行李は豊岡と、兵庫県内にはヤナギ科の植物をもとにした工業が盛んである。シダレヤナギは街の並木や川端に植えられ、東京の、むかし恋しい銀座のヤナギとか、浜町・河岸(がし)のシダレヤナギは名高いが、上記のようにヤナギは兵庫県と縁の深い植物である。

また、最近ショック問題で、ピリン系解熱・鎮痛剤の使用については、やかましい論争があるが、アスピリンだけは別格である。これはピリンの名がついても、一般のピリン系薬剤とは違ってサリチル酸系統だし、薬の王ともいえるものである。このはじめは、ペルー中央山地で栄えた古代インカ帝国の医師たちが、ペルー柳(キナ=アカネ科の常緑高木)の樹皮を土人に解熱・鎮痛用として(マラリアに)使っていたのからヒントをえたによるといわれているから、ヤナギは人類全体にとっても、ありがたい植物である。

ヤナギの古木には幽霊と結びつく伝説があるが、それは枝垂(した)れる形の特殊さに因があるのであろう。死者にはヤナギ卒塔婆(そとば)といって、死後33年たつと年忌(ねんぎ)にヤナギを立て、これが根づけば霊魂は清められて家の先祖のなかに一霊体として融合するという信仰もあった。ヤナギは生殖力旺盛で、挿木してもつくところから、神霊運搬、信仰圏の拡大に利用されたのが真相であろう。

チャは宇治、静岡に代表されるが、栽培の歴史からすると兵庫県もずんぶん古い。平安時代初期から天皇の奨励をうけ、五畿内(山城・大和・河内・和泉・摂津)、近江の諸国とともに播磨においてチャ栽培は行なわれていた(加東郡社町嬉野、多紀郡丹南町などに現存)。

むかしのチャは延命の薬として用いられており、中国から仏教、ことに禅とともに入ってきた(茶禅一致)。茶寿という言葉もあるが、これは茶の字が二十と八十八からなっており、たして百八、この数字には除夜の鐘のように煩惱解脱(ぼんのう・げだつ)の意味もあろうが、百才以上までの長命というのを祝ったものである。

ヤナギも、チャも、わが国の民間伝承上、重要な植物である。

その3. タケ(竹)とスギ

わたくしは、旧制中学の時代に本誌を編集しておられる室井紳先生に博物(いまでいう生物)を教わった。そのご年を経ること20年、たまたま昨夏、小著(六月社刊「日本の姓名」)を世に出すにあたってお世話になり、さらに生物学という同じフィールドを専攻するものとして(小生は小児科医)、ひき続き、その面のご指導をうけるようになった。

室井先生はタケの研究家として名があり、農学博士の学位をえられた。それをさしおいて、わたくしがタケを語るのはおこがましいが、酒との関係で縁の深いスギとともにタケのことも一筆だけ触れてみたい。

タケは、おもにアジアに産し、ないのは濠洲とソ連とのみ、その用途は広く、わが国でも多方面に利用されている。

兵庫県は酒どころ灘をもっているが、白鶴(はくつる)、白鹿(はくしか)などの醸造場では、古くはタケの葉で殺菌したので有名である。また、蔵出しの酒をタケの杓で汲んで飲む。酒造りの樽となるとスギ(わが国特産)で、これはスギ材にピネン・ジペンテン・スギネン・クリプトメリオールという成分が約1%含まれており、香気があり、それが酒の風味を増すからである。醤油、味噌などの醸造も播州・竜野を中心に兵庫県は名産

(以下、p. 168より)

ウ・ウワバミソウ・ダイヤモンドソウなが着ど生しており山の傾面にはシラキ・トチノキ・ヨグソミネバリ・アカシデ・クロモジ・モミ等の下にハイイヌガヤ・キッコウハグマ・ミヤマカタバミ・ホソバトウゲシバ・オオバインモトソウ・ニシノヤマクワガタ・イワウチワ・ヒロハチョウチンゴケなどが生育している。また倒木や樹上からはヨウラクラン・ムギラン・カヤランが採集された。しかし特筆すべきは内海氏によりエビゴケ・スギラン・モミランが発見されたことであり、スギラン・モミランは県下ではじめての採集であるとのことであり、本採集会の終りを飾るにふさわしいものであった。またナツエビネの一株も内海氏により採集された。

10時半頃滝を出発し同じ道を下り、オオフジシダをとった場所の少し奥でフジシダをとる。原の引原川のほとりで昼食をとり、12時半貸切バスに乗車帰路につく。途中、播磨一の宮の伊和神社に参拝その社叢をみる。2時頃姫路駅到着。無事採集会も終り各自は獲物で重くなったリュックを背に家路へと急ぐ。

筆をおくにあたり、ご指導をいただいた田川・岩槻両先生、多人数の入山を許可下さった営林署、準備に奔走された藤本義昭氏、地元での連絡や荷物の運搬にあたって下さった中原哲男氏、宿舎や食事の世話をして下さい

地だが、これらもスギ樽のなかで造ると美味なのである。

「スギ折り掛く」という語は、スギの古木の穴にたまった水が、ときに醸酵して酒のようになるところから出たものであろうが、スギの枝を束(たば)ねて軒に吊りさげ、酒を売る店のしるしにするなど、スギは酒と縁が深い。

しかし、酒を汲む杓(しゃく)は上記のようにタケづくりのものである。これは酒を燗するという「かん」が、もとは簡、つまりタケの中空の部分(たけづつ)に入れることを意味したあたり起こりがあるようである。羊羹(ようかん)の「かん」も同じで、そのため羊羹のことを「さおもの」ともいうし、一棹(さお)、二棹と数えたりもするのである。

タケは成長が早く精力のかたまりであり、スギは常緑、まっすぐ高木になるので神霊の宿る木として祭られ、神社林に使われたりする(常緑樹尊崇は世界共通)。この両者も民俗的に価値高い植物である。

ついでに記しておく、兵庫県には川西市に、西の日光と称される多田神社(多田源氏発祥地)があり、ここは四囲がマツの疎林なので社殿は白木造りになっている。一方、日光の東照宮は衆知のように朱塗りである。それは東照宮の場合、背後をスギの密林で覆われているため、それとの調和をとる必要から社殿を朱にしてあるのだといわれている。

た民家の方々に対し深く感謝致します。なお、この記をかくにあたり岩谷氏より多大の助言をいただいたことを付記しておきます。

ミカズキグサの自生地について

本年加印支部主催の標本鑑定会に運びこまれた小学生の標本中に1本のミカズキグサを室井紳氏が発見、採集地を聞き9月4日にその場所に行って沢山あることを確認しました。場所は加古川市上荘町小野で、神姫バス上荘線に乗り小野で下車、田の中の道を北に行くと同麓に数軒の民家があり、路は行きどまりとなります。それより畦を左に山麓にそって行き右に曲って小溝にそって行くと25,000分の1の地図上の「長池」の下の小さい池のほとりにでます。その池の北側の傾面の広い湿地が自生地です。そこにはモウセンゴケ・コモウセンゴケ・インモチソウ・ミミカキグサ・ホザキノミミカキグサ・サギソウも見事に生えており、沼地にはミズギボウシもあり大変面白い場所です。

なお、ミカズキグサは氷河期の残存植物であり、保育社の原色日本植物図鑑によれば「日あたりのよい高原の水湿地に生える多年草：分布は九州・本州(主として中部地方以北の高山)・北海道」となっています。

(40.9.14 杉田記)